

第五章 職人と瓦のこれから

今を生きる瓦職人たち

崇峻天皇元年（五八八）、日本に瓦が伝わってきたとされているこの年から一四〇〇年と少し。この時日本にやってきて、瓦というものを教えてくれた八名の者たち。日本に渡ってきた彼らは、歴とした瓦職人だったのだろう。言葉も顔も、文化も全く異なる、異国の人々に、自分たちの知識や技術を教えていくということ、それは並大抵のことではない。知らない土地で自分たちが持っている文化を広めるということは非常に重要であり、また、辛く厳しいことでもある。そのような重大な仕事をやりきることができたということ、それは大変大きなことであり、今考えてみても信じられないことだったのではないだろうか。そもそも職人とは、「自分の技能によって物を作ること、職業にしている人」「身につけた技術によって物を作り出したりする人」（大辞林、大辞泉より）のことをいう。自分たちに伝えられてきた技術を、しっかりと身につけ、異国の地である日本でもその歴史を伝えることができた彼らは、心から讃えるべき職人と言っても過言ではない。日本に瓦が伝えられてから何千年も経った今、瓦職人たちの仕事に対する心のもち方や、気持ち、仕事の方法などはどのようなようになってきているのだろうか。

現代の瓦屋が求められていること、それは一体何なのか。どのようなことを考えて仕事をしているのか。まず、私の一番身近なところから見えていってみようと思う。長野県で父が営んでいる森沢瓦工業では、『魂の宿る瓦屋根をつくる』、『良い物をより安く提供する』ということを考えて仕事をしている。父をはじめ、家に働きに来る従業員の職人たちは、自分の腕を磨くこと、新しい瓦の開発などについても考えている。また、全日本瓦工業連盟主催の、全瓦連技能グランプリに出場するなどして、日々瓦屋根というものを学んでいる。どんなに経験を積んでも、常に学んでいこうというその姿勢が非常に職人らしく、素晴らしい。古い歴史をもつ瓦屋根は、ただ数年学んだだけではとてもじゃないが自分のものにはできない。魂の宿っている屋根を造り上げるということは、そう簡単にはできないことではないのである。

現在日本で一番の瓦職人であると言われる、奈良の第一級瓦職人、山本清一という人物がいる。日本の代表的なお寺である法隆寺の金堂や、東大寺大仏殿、唐招提寺金堂、松本城、姫路城などの屋根の保存修理、薬師寺伽藍や平城宮朱雀門などの再建に従事した人物である。山本清一は、瓦に関する知識や技術はもちろんのこと、誰よりも熱い心をもった職人でもある。彼は、瓦屋根をつくりあげるといふことに対して、『著書』めざすは飛鳥の千年瓦』の中でこのように語っている。

「焼きによって見た目の風合いが変わるといふのも、おもしろ味のあるものです。陶芸家は自分のつくった作品が火の力で変わっていくのを知っているから、なんか変わったものが焼けへんかなと思うところもありまっしやる。しかし、わしらの仕事は予想と変わっては困るのや。・・・瓦は焼き上がってから、屋根にのせ、さらにその屋根を長い年月もたせてなんぼや。なかには素人にわからんように、ごまかしをほどこして世に送り出すのもある。誰も屋根の上が上がってきいへんから、そんな知りまへんわな。けれども、後で修理をする人が見れば一目でわかる。誰にも恥じない、質のよい、長持ちする屋根をつくってなんぼというのが瓦屋であり、屋根屋や。・・・たまには間違っこともあるけど、間違ったら自分で責任を取るつもりでやってるんや。」（二五六ページ、五〇一五行目より）

この言葉からも山本清一という瓦職人が、瓦屋根にどれだけの熱い心を注いでいるのかが分かる。屋根の上まであがってこなければ、屋根の細かい部分までは分らないし、ましてや素人には本当に何も分らない瓦屋根。だからといってただ単に稼ぎや自分の利益だけのために屋根をつくっているのではないのである。また、その屋根を美しく、誰にも恥じないようにつくりあげることだけではなく、もっともつと先の先まで考えて瓦を葺いている。今現在のためだけでなく、何百年も先のことを頭に入れて屋根をつくっているのだ。前に挙げた、山本清一の著書の中では、このようにも記されている。「・・・わしらがつくったもんを、五、六十年しかもたんといいとる無責任な瓦屋があるそうじゃ。わしらは少なくとも千年はもつようにと思つてつくっているのに、何を根拠に五、六十年というんかね。アホな話や。・・・瓦も発掘されたものやとか、ちゃんとした瓦があるから、それらを見て、なんで飛鳥の瓦が長持ちしとるのかを考えて、いままでやってきたんや。・・・唐招提寺の天平の鴟尾も千二百年もつてきたのやから、わしらはもつともたさないかんと思つていますんや。これまで以上の技術でフオーしておけば、もつともたせられますからな。」(二五七ページ、三二―二行目より)

昔と比べれば、職人らしい職人という人は少なくなつてしまつていのではないかという思いもあるが、日本にはまだまだ素晴らしい職人たちがいることに気がつかされた。私の中での職人像というのは、自分でこだわりを強く持つていて、常に学んでいく姿勢もある気持ち熱く強い人である。瓦屋根が少なくなつてきてしまつた現代の中で、自分の姿勢や気持ちを貫き通し、納得のいく仕事をするということは、非常に大変なことである。しかし、大変な今の時代だからこそ、美しい仕事をする人が真の瓦職人なのだろうと思う。今一番、屋根に対して求められていることは、より安全でよりお手軽にということだ。見た目に関しての美しさや、瓦ならではの重厚さは全くと言っていいほど求められていない。瓦職人という人たちは、今やもう影の存在になりつつある。一つのことを極めて自分のものにする、そこに至るまでの努力や苦勞、少しでもその影の部分に目を向けてみてもいいのではないだろうか。一つのものをつくりあげるために大切な、心や気持ちを現代人は思い出す必要があるのではないだろうか。古い時代の技術などだけでなく、その気持ちも伝えていけたら、それは大変素晴らしいことである。日本で一番の瓦職人である、山本清一は、「仕事は心でするもんや」と著書の中でも述べており、職人を職人らしく育てようと思つたら、朝早起きをさせることから始めると語っている。職人の心がまえと体づくりを先にして、それを毎日行つていく中で、心も技もできてくるものだとし、朝早く起きるといふ一種の修行をさせているのだそうだ。

昭和五十(一九七五)年、技術者を養成し、先人の残してくれたものをうまく取り込んで、伝統を継承、保存し、さらに瓦の原点を復元して、暮けるようになればいいということから、日本伝統瓦技術保存会というものが発足されている。これからでてる若い瓦職人たちに、伝統を受け継いできた瓦のことをしっかりと学ばせ、これから先へ継承していきけるようにしなければならぬと強く願う、職人たちによって発足されたのである。金儲けに走る。仲間の足をひっぱる。自分のところさえよければいい。このような気持ちの瓦屋がどうしても増えているのが今の時代の現状で、そこが非常に難しい時代なのである。技術を伝え教えながら、職人という人間を育てていくこと、勉強をしながら経験を積み重ね、職人として大きくなっていくこと。これからの瓦業界では、そこを一番の重要なポイント

として考えなければいけないのだと思う。

「瓦づくりは人づくり、人づくりは国づくり」山本清一は、著書でこのような言葉を述べていた。千四百年前の瓦の、真の復元を目指し続け、研究し続けていく上で、実際に屋根を葺き、後の世代を引き継ぐ若者にも数多くの屋根をつくらせる。歴史ある瓦屋根をこんなところで終わらせてはいけないのだ。彼は、その本の中で最後にこのようなことを強く述べている。「・・・むしろ、もうすくなくなってしまうんやからな。人を育てながら、ものづくりをするということは、国の宝やと思いつせ。無形の財産ですわ。教えて、育てるといふ教育をこれからやっていかんことには。人は育てられるときに育てておかないと取り返しがつかんようになる。一代欠けたら繋がるもんも繋がらんようになってしまつ。いつでも余裕ができたときにすればいいというんでは間にあわんこともあるのや。」

古い歴史あるものが失われつつあるこの時代、それと共に貴重な職人たちも忘れられ、目に見えて少なくなっている。最近では何事に関しても海外からの影響を受けているということもあり、和ではなく、洋の色が強い日本になってきてしまっているのを感じる。確かに、海外のものや、新しいものに憧れを抱いたり魅力を感じる気持ちは非常によく分かる。しかし、そのような気持ちの中にも日本の心、日本の風景というものをなくしてしまうのでは良くない。古くさいというイメージを持たれている瓦屋根だが、今の時代にもその瓦を伝え続けていこうとしている者たちがいる。この先ますます厳しくなるであろう中で、どれだけ多くの素晴らしい屋根を残し、継承していくことができるだろう。それは、瓦職人だけの問題ではなく、日本という場所に住んでいる私たち一人一人が考えてみなくてはいけないことなのではないだろうか。

日本の建築美の頂点 奈良の薨と日本一の瓦職人

山本清一。昭和七（一九三二）年、奈良県生駒市に生まれる。一四歳の時、瓦葺き職人だった父、山本宇之松に弟子入りし、現在は山本瓦工業として瓦屋を営んでいる。日本一の瓦職人と言われており、法隆寺の金堂や、東大寺大仏殿、松本城、姫路城など、数多くの国宝や重要文化財の屋根の保存修理などにたずさわっている。

今回、人間国宝とまで言われている山本先生に直接お会いし、生の声を聞くことができた。実際に会ってみて、非常に目の力が強い、これぞ職人の中の職人だという印象を受ける人物だった。約三時間にわたり貴重なお話を聞き、瓦の職人の世界だけでなく、そこから様々な人生勉強をさせていただくことができた。

山本先生は、約六〇年もの間ずっと、瓦屋根と共に生きてきたと言っても過言ではないほど、瓦と長い間向き合ってきた。六〇年という大変な時間であり、その間に様々な時代がある。その中で、今と昔とを比べてみると、屋根の世界でも多くのことががらりと変わっていることが分かった。「この六〇年で、私生活も職人の世界も、えらい変わった。」と初めに言った先生の一言は、非常に深みのある言葉だった。時代自体が大きく変わってしまったこともあるが、昔は小さい時から親の元を離れ、職人になるための勉強をしていた。これは、所謂徒弟制度であり、職人の所へ最低でも五年間行き、その後お礼奉公として一年間働くというのが普通のことだった。その頃は戦争もあったために、二〇歳までに瓦職人としての技術や心を学んでおかなければならず、それが当たり前のことだったのである。小さい頃からそのようなにして修行することで、瓦に関することだけではなく、人間の基礎ができてくるのだと山本先生は強く語っていた。また、この時代は『ケガと弁当は自分持ち』と言われるくらい、自分自身での責任が大きかった。このようなことは今の時代では絶対にあり得ない。徒弟制度であった職人の世界も今ではサラリーマン化し、下働きの頃から給料を貰い、ケガは自分持ちではなく会社持ち。高校や大学を出てから瓦職人を目指すということは珍しいことでも何でもない。私は、このような時代になってしまったことは仕方がないことだが、人間の基礎というものがしっかりとできる時間が、現在ではあまり無いのかもしれないと感じた。

一つの屋根をつくりあげるにしても、今の住宅はスピードやデザイン重視になり、古くならざらすぐ新しいものに移り変わる。それと共に古いものだと思われている瓦屋根も無くなっていく。生活様式や建築文化さえもが西洋のように変わってきてしまい、金儲けのことしか考えてないような家がどんどん建てられていく世の中になってしまったのである。山本先生は、そのような最近の一般住宅の屋根はほとんど葺かないのだという。『家は財産である』という昔の考えが消え、今や家は消耗品になっている。そのようなもののためには仕事はしたくないというのが山本先生の気持ちなのである。『資産としてしっかりと建てるような家の仕事はやるけど、建てては売っていくような家の仕事はしない。せつかく習った技術を人の商売のためになんか使いたくない。そんな所に使ったらもつたいない。そんな家は、本当の木材を使わずに自然に反してつくっているからゴミに等しい。家を建てるなら二〇〇年はもたせなあかん。』はつきりところ言った山本先生は、呆れているように、怒っているような感情をもっているように感じた。人と人との繋がりも、時間のゆとりも無くなり、スピードばかりの世の中に嫌気がさしているように見えた。そしてまた、こん

な世の中だからこそ、先生は昔から長い間残っている貴重な屋根の修理や、それを復元することで様々なことを伝えているのではないだろうか。

お話を聞く中で一番印象に残っている言葉がある。この言葉には、山本先生がどれだけ自分の仕事に誇りや熱い気持ちをもつて生きてきたかが詰まっている。

「瓦屋みたいな仕事は、直に残って行く仕事なんや。生のものズバリの仕事やな。いつまでも残っていきありがたい職業や。がんばりや、感謝の気持ちもつてやったら同じことや。たつて違ふんや。」技術の面だけでなく、これだけ仕事に対しての情熱や感謝をもっているからこそ、日本一の瓦職人と言われるのだらうと思う。職人の仕事というのは残っていくものだから、恥ずかしくないようにするという心をずつともつて仕事をしている人は、現代では少ないのではないだろうか。どうしたら早く簡単に稼ぐことができるか、仕事が増えるか。そのような自分の利益になるようなことばかりを考えているような気がする。

「金が欲しい奴は屋根屋なんてやめればいいと昔から言ってる。」「経営者としてはだめだが、金のことは一切考えないんや。」山本先生は、人のために働いて、その中で自分の心や技術も磨いてきた。これが本当の職人だと心から思った。

これから先の瓦業界は非常に厳しいものになる。これだけ新しいものが増えていく中で、瓦というものは段々と忘れられていく。そして、昔ながらの職人は姿を消していく。新しい建築方法によって、腕の良い昔からの大工が消えていってしまったように。全てが崩れてきており、全てが変わってきてしまった。一つ一つ手で作られていた瓦も、今では全てが機械化され、土や瓦自体に一切触れることなく、コンピュータを見て機械を管理しているだけで出来上がってしまうものまであるような時代なのである。そんな時代に、そんな時だからこそ、『出来る限り全て手仕事でつくり、原点に戻る』これが山本先生がずっと考えてきたことである。瓦が日本に伝わってきた頃には、当たり前のように手でつくられていたものだが、今一から人間の力だけでつくるということは、考えている以上に大変な作業である。元の形のまま残っている瓦をとことん研究し、調査した上で実際につくっていく。気が遠くなるような作業である。「機械でつくられた瓦には精密さはあるけど、ありがたみがない。職人も機械に頼っているだけじゃだめだ。古いものを大事にしない今は、もつたいたいというのを忘れさせる時代になった。わざと苦労することでありがたみを見分らせるんや。」そう言っていて手作りということの大切さを語った。全てを機械でつくり、スピードやデザインだけを重視するのではなく、それと真逆のことをすることによってもつたいたいという気持ちが生まれるのだ。

奈良県は日本で一番と言える程歴史のある建物や、瓦が残っている。山本先生の言い方をお借りすると、日本の文化を代表している、『日本の玄関』と言える場所なのである。器用さや勤勉さは世界で一番だと言われていた日本人が、一つ一つつくりあげ継承し続けてきた、歴史ある建物。屋根瓦。せっかく伝えられてきた瓦の技術を、この時代で終わらせるわけにはいかないという強い気持ちで、山本先生は若い者たちに自分が身につけてきた全てのものを教え続けている。職人といえば、自分だけが長い時間かけて収得した技術や知識は他の人には教えないというイメージがある。自分だけが得ることのできたものとして、自分の中だけに秘めておく、そんなイメージだ。しかし、山本先生の場合、まだ技術も知識も甘い若い者たちに、自分ももっているものを如何にしっかりと伝えていくかを重視している。瓦職人自体も少なくなってきたことも事実だが、ちゃんとそんな先

生を追ってついでくる若い職人たちがいるのもまた事実なのだ。自分自身のためや、現在の世の中のためだけでなく、これから先の未来のことまで考え、職人たちを育てていく。「自分ももっているものは、次に渡していかなければならん。職人の技術には税金もかからんしな。弟子たちに伝承していくのが仕事やな。」と笑いながら語った日本一の瓦職人は、若い者たちを育て、次の世代に受け継がせていくことが一つの生き甲斐にもなっているのである。

山本瓦工業では、事務所や工場に看板を建てず、また、どこに行っても営業というものをしない。それは、自分たちが手がけた屋根そのものが看板であり、その屋根の出来が山本の名前を売ることになっているからである。それだけ自分の仕事に自信をもち、丁寧に仕事をしているかがこのようなことから伺える。このような、瓦やその歴史、日本の文化を愛する素晴らしい職人たちが日本にはいる。これから先、瓦の存在が段々と薄れていってしまったとしてもこのような職人がいるということは薄れさせていってはいけない。少しずつ確実に変わってきてしまっている今の時代で、『瓦屋根』を通して昔のように自然と共に生きることを教えてくれる瓦と、瓦職人たち。これからはずっと、守っていかねければならない存在なのではないだろうか。

「今後とも『瓦』ぬ心でやっていきます」

職人山本清一は、今までと同じように情熱をもち、これから先も変わることなく日本の文化を伝え守り続けていくだろう。

(瓦職人山本清一・山本瓦工業にて。二〇〇七年・十一月)



山本瓦工業の瓦づくりと職人たち

一から手でつくり、昔の瓦を復元する。非常に根気のいる作業だが、山本瓦工業では数年前からこの取り組みが行われている。一切手を抜くことなく、様々な人の助けを借りながら完全なる復元を目指しているのである。全て簡単に、人間の手に頼ることなく瓦をつくる現代で、敢えて手づくりをしている。今回奈良の、山本瓦工場で実際につくっている所を見せていただき、一からつくる難しさというのを、肌で感じる事ができた。また、大変ながらも、自分たちの仕事を楽しそうにやっている職人たちに感心させられた。瓦に対する愛情と、自分の仕事に対する情熱や誇りをもって瓦づくりをしているのが見えていただけで分かり、非常に貴重な体験をすることができた。

一からの瓦づくりと、職人たちの姿



(瓦になる前の土)



(粘土の板が切断され、瓦の形になっていく)



(プレスされて形が整えられる)



(整えられ、模様もつけられた瓦)

(一つ一つ手で形を整える軒丸瓦づくり)



(軒丸瓦を乾燥させているところ)



(丸瓦の形を整える職人)



(お寺につけられる露盤)



瓦になる前の土の段階からとことんこだわり、様々な場所の土を研究して今使われている土に至った。そしてそこから一つ一つ手づくりで作られていく。粘土というのは水の量や乾燥具合で全く違ってくるので、保管の仕方に一番気を遣うと言っていた。瓦の形や、部分部分の長さ、角度などは全て研究して決められており、まるで機械で作られたかのように美しく形が整っているのが非常に印象的だった。一つ一つ自分の手で触れることで、瓦にかかる思いも強くなり、丁寧なものに仕上がる。

(様々な種類の瓦がおかれている棚)



(焼かれる前の瓦の保管場所)



(窯に入れられ、焼かれる瓦)



(梱包されて積まれる瓦)



工場自体が想像以上に広く、かなりの枚数の瓦が保管されていた。一度に四千枚もの瓦を焼くことができる窯が二つと、二千枚焼くことのできる窯が二つあり、焼く温度などにも非常にこだわっていた。

山本瓦工業の職人たちは、朝六時過ぎにはもう工場につき、それぞれの仕事に取りかかっている。機械でつくられている瓦でない分、一つ一つを本当に大切に作りあげているのが分かった。自分の子どもを育てているような気持ちでいつも瓦づくりに励んでいるのだと思う。作業中の職人たちの後ろ姿を見ているだけで、優しく愛情込めて瓦をつくっているのが感じとれた。